

## 苦惱

### 同情

#### 一、貧困

現代人の頭を金が支配する。一職工がいる。時ならぬ間に数十百万円の身代が出来た。一躍多願納税者になる。御殿のような広大な西洋館、白木造の日本間、金にかした庭園が出来る。大学卒業でも専門学校卒業でも金さえ出せば使うことが出来る。高位高官も富豪の前に頭を屈する。

如何に才能があつても金を播くほど使わねば代議士になることも出来ぬ。

小学校では中程の成績であつたけれど親の身代のお蔭で今はどうにか学士になっているのに引替えて、小学校では六ヶ年間級長を勤めた秀才が、卒業するとすぐ村の役場の小使いにやられてしまった。

こんなことは忍べばまだ忍べる。

けれどもあなたは生れながらにして貧困であつた。家には病人が出来た。父が早く死んだ。払われそうにもない借金が出来た。祖先から伝わった身代も今は人手に渡つて一家がただ労働によつて食つて行かねばならなくなった。

貧困、文字通り貧しいことは苦しみである。金なくしては一日だつて暮し得ない今日、貧しいことは生活当面の最大なる苦しみである。

私にもその経験がある。あちらからもこちらからも金の催促に来る。しかも支払うべき金は一文もない。どうしても出さねばならぬけれども、どうにも出来ぬ私の一番大切な書物を売つて出した位の経験はある。

金がないが故に日も夜も苦む人があまりに多い。その御相談を受ける。けれども私にはどうにも出来ぬ。もし金があれば時には数百の金で人一人救うことさえ出来るのに、私にも金がほしい。

しかし私はもつと考えて見ねばならぬ。

#### 二、病苦

治すことの出来ぬ病魔に犯されて、一生を独身で暮さねばならぬ婦人がある。治すことの出来ぬ病氣にとりつかれて、夫に精神的に棄てられた婦人がある。立派な教育を受けながら病氣になったために、あたり有為の身を病床に横たえている同胞もある。もしこの病氣さえ全快するならば、地位も、財産もその他何物を失つても厭わぬ人さえある。病氣は最大の不幸である。

更に貧しいあなたに病が襲つて来て、滋養分をとるにその代償なく、名医の診察を受けようとしても教十円の謝礼どころか日々の薬代すら借金になる。みすみす治るべき病をも治し得ずに病床に横たはつて泣いている哀れなる同胞、そんな事実さえ今現に数人は確かに私の知人にさえある。

私は金がほしい。病氣が全治するものなら全治してあげたい。私は病氣に同情する。

しかし私はもつと考えて見ねばならぬ。

### 厳肅

人生は厳肅である。断じてふざけたものでない。

何故に人生は厳肅なのであろう。人生には苦があるからである。

否人生はそもそも厳肅であるのだ。けれど金がある、衣、食、住がぜいたくになる、快楽を求めて走る。道草がはじまる。愛がなくなる。ここに人の日暮しはふざけたものになるのだ。

親の死んだ葬式の夕

愛する人と別れた涙の日暮れ

死の宣告にあつた往生の秋

落第を申し渡された学生の胸中

悪事が露顕して冷たい獄裡に送られた夜

そのどこに、何れにふざけた心を許されようぞ。苦なる哉。苦は真に不真面目なる我への鉄槌である。

人生生活の厳肅味わ苦から生れる。もし人生に苦がないならば地上は腐敗した極楽であらう。

厳肅なる人の胸中には厳肅なる問題が生れて来る。

### 努力

三千年来あらゆる天才をしてその天才の名をなさしめたのは、苦から放たれて、如何にすれば幸福たり得るやの問題のためであつた。人間の努力は、苦から開放されるために使われ、苦に打ち勝たんための努力である。

苦を生きる事実として味わねばならない者はじつとしてはいられない。私には苦しい事柄がいくらでもある。苦しいが故にどうにかせねばならぬ。苦から出ねばならぬ。人生をある一面から観た時に、人々の生きんとする努力は、苦しめるが故にはらわれる。苦なき世界に精進も努力も考えられない。

自分の生活が苦になる

自分の病気が苦になる

自分の悪人であることが苦になる

自分の愚者であることが苦になる

社会の現状が苦の種になる

国家の将来が苦の種になる

そうした苦の上のみ、人間のどうにかしたい努力が生れる。

苦悩は努力の源泉であり、宗教や、信仰や、道徳、芸術、哲学の母胎であり、やがてそれらが活躍すべき舞台である。

### 哀れむべき者

今日まで苦むべき何者にも出会わなかつたというのか。不安なる幸福。

「苦むのは馬鹿だ。生れた以上なるべく楽しんで暮せばいいというのか。愚なる大胆。

苦しくてとても私は生きぬく力が生まれませぬ。いつそ死んだ方が増しでありますというのか。求めざる者の悲哀。哀れむべき者よ。救われざる者よ。

## 運命論

### 一、苦から運命信者

私どもの心は幸福で楽しく暮される時には、何でも出来ると自惚れる癖がある。けれども苦しいことに度々出会って来ると運命信者になってしまいます。商売をして見たが、甲は成功したにかかわらず乙が失敗すると、「どうも運が悪かった」と言う。甲にむかつて「君は運がよかった」というと、運ではなくて自分の才能があるのだと自慢しようとしません。思うことがずんずん出来てゆく時には力強いことを言っている人でも、何か不幸が続きますと、立ち上って行く力が失せてしまつて「運命だ」という考えが生れて来ます。商売には失敗する。家の内には病人が続く。運が悪い。ひよつとおみくじがひいて見たくなくなる。辻占をむいで見たくなくなる。八卦にかかつて見る。九星判断を見る。神に神意を問うたり、巫子の御告げを聞いたたりして、自分の運を知つて安心しようとする。

ここに人間の迷いがはじまつて来ます。更にこの悪運をどうにかしたいと考えてもがきはじめる。この考えの上に幾多の祈祷教が出来て、この悪運を払いのけてやるという出して、人は迷信家になつてしまいます。これが迷いであります。迷信は人の世の苦のある間なくならないのであります。真言宗のような高級な宗教でも、今は全く現世祈祷の迷信教におちて、真言寺は加治祈祷にその命脈をつないでいると言つてもいい有様である。病人が続くと山に行つて聞いて来る。家の向きが悪いのだという。家の向きを変えたりしはじめ。三百六十五日一日だつて悪い日はないので、吉日というものが出来て、その吉日でないと結婚や縁組でもしない。その地方々々で随分と迷信を有しているが、それは皆な人の苦から出た運命観から出たものである。

### 二、親鸞聖人

親鸞聖人は運命信者ではない。

「かなしきかなや道俗の良時・吉日えらばしめ

天神・地祇をあがめつつ 卜占祭祀つとめとす」

と悲歎していなさる。真宗の信者はこの現世祈祷をしない。けれども「何故あなたは、願をかけたり、祈祷しませぬか」と問うて見ると、真宗ではしては悪いというきまりだからしないと言うものが多い。そんな連中は心の内では、運勢を見てもらつたり、八卦にかかつてたり、辻占で運が見たかつたりする位の心はもっているのだが、して悪いからしないというのである。運命信者の亡者であることに於て同一であつて、もしこれに信仰があるにしても、それは迷信かあるいは概念の信仰であつて、未だ南

無阿弥陀仏にはなりきつていない。救われたとは、九星の判断も、辻占も、神意も、おみくじも、八卦も、祈祷も、そうした一切のない広い世界に出たことである。

### 三、智恵

苦にたまりかねて、運命信者に、運命論から、迷信に、迷信から死に、これが迷う者の姿である。苦はまことに人をかくの如く殺すこともある。けれどもこれは人間の智慧のない痛ましい姿である。然り、心眼が開いて来なかつたのである。仏智が我がものにならなかつたのである。無明である。人はもつと本然の姿にかえらねばならぬ。苦の真意義を見出さねばならぬ。

### 忍受

#### 一 二つの態度

生きることは苦しむことでもある。苦は必ず受けねばならぬ。

苦を受けて行く態度に二つある。一つは嫌々ながら人生の重荷を負うて行くのである。一つは自ら求めないまでも、荷わねばならぬ種々なる苦悩を自ら進んで背負うて行く態度である。

物質的荷物は、他人に背負わせれば軽くもなる。けれども精神的苦悩は、これを誰にも負わせようがない。自分の一切の業苦を自分が担うより外に一切の方法がない。4  
そこに、「お前よ荷物をもつと軽くしてやろう」という教えがあり、祈祷があり、邪神があり、迷信教があり、偶像がある。けれどもそれは人間の弱点につけこんだ、やりずるい人間が作った商売にしか過ぎない。

#### 二、全てを引き破れ

一度は苦に目覚めて悩まねばならぬ。どうしたら現実から永劫の苦のがれられるかと求めて見ることもいいことだ。すると私を苦よりのがれさせてくれるような姿であらわれてくるものが沢山ある。

けれども一度真実の智慧によつて、一切を赤裸々に見ようではないか。

汝の苦悩に同情ありげにニコツと笑つて現われて来る全てのは汝を誘う悪魔である。汝の智慧の眼でにらんで見よ。皆その正体を現わして逃げてゆくではないか。

まことに一切を一度ははり裂かねばならぬ。

汝が有するその神を引きちぎれ。

汝が考えておるその仏を打ちこわせ。

金を、地位を、名誉を引き破れ。

妻を、子を、夫を、家を、それに苦を打ちかけようとする考えを引きちぎれ。

僥倖をたよろうとする心、運だめしをしたい心、祈祷したい心、願をかけた心、おおその全てをひきやぶれ。

汝が有する学問を、道德を、善悪を、正邪を、その全てをかき棄てよ。そうまでしないでもいいではないかというのか。それが汝の敵なのだ。その悪魔の声をひきやぶれ。

そうした時、汝はそもそも何になる。

天上天下、たった一人の汝ではないか。

汝以外に何物がある。

永劫の苦を担って、永劫に旅する汝のみである。

### 三、悲泣

泣くより外ないというのか

そうだ。苦しむ汝に全て生温い、甘たるい一時的の同情の言葉を用いまい

泣け、苦悩を抱いて泣け

泣け、夜を徹して泣け

### 四、寂寞

寂しいというのか。

寂しいということが今知れて来たのか。それでも遅くはない。よくも目覚めた。その汝を一度は知らねばならぬのだ。一生に一度はある。その寂しさの前に何ももって来てごまかしてもならぬ。

汝はそれを知らなんだのだ。今まで知らなんだのだ。

汝の周囲をとりまく全てが駄目なのだ。汝の苦を半分にしてくれるものは何も無いのだ。

でもまだ汝は、その荷物を他人に負わせようとするではないか。

汝の卑しげなその顔つき、止めよ止めよ、汝のそのずるそうな手をひけ。見よ。今こそ六道輪廻のあさましい姿が見えるではないか。はつきり見えるではないか。

天上界では、来るべき苦の種とも知らずに、唯、様々の事実を心を奪われていた。

人間界では、汝には善悪があつた。正邪があつた。貴賤があつた。汝は、善と正と貴と真と幸福と快樂との幻影を追うて来た。

修羅道では、汝は戦いによつた。戦いによつて、汝の正しい生存を主張しようとした。戦いに克ちさえすれば汝は即座に幸福だと考えていた。けれども汝は苦から逃れ得たか、汝は一層の血みどろになつたではないか。

畜生道では汝は牛のように、豚のように、如何にあさましい迷いでありながら、それをそれとも知らず、無明を無明と知らず、あさましい奴隷仕事にただ追われて来た。

餓鬼道では、汝のただ毎日食うことにのみ使われた。五十年ただ飯を食うて暮す。これを餓鬼道というのだ。

地獄では汝の胸三寸に燃えあがる紅蓮の炎、汝の胸三寸に閉じこめる水、その他あらゆる汝の仕業から来る罰を受け、報いを受けつつも、それをそれとも知らずに、ただ泣いて狂つて来た。

見よ、見よ。我が身は現に罪惡生死の凡夫。はつきり六道輪廻の旅が見えるではないか。泣けよ。悲泣せよ。

## 五、自殺

汝は苦しいから死ぬるといふのか。

汝が自殺する時、汝は汝の罪に對する恥を受けないですむかも知れぬ。

時には汝の自殺を世が挙つて讚美するかも知れぬ。

けれども汝が如何なる哲學的意義をのべて死んでくれても、それよりも、忠実に全てを負うて、血みどろになつてでも生きぬく汝を尊く思う。

汝は過去に死にたいほど苦んだことがあるう。けれどもよくも生きて来た。自殺は脇道だ。自殺が決して汝の全体の解決ではない。

## 六、救いとは

救いとは苦をさけることではない。汝の罪も、苦も、一切を汝自身が背負つて立つことである。誰も負うてくれる者のないことに目覚めるのである。

如来の救済ということ痩せたぢれ馬に重い荷を背負わせて、嫌がるのを、無理に強い手綱をつけて引いて行かれるように考えている者がある。

それで安心があるうか。光明があるうか。もし如来の本願ということを私の外から私が知らぬ間に加えられる力とするならば、如来の本願というたり、如来の救済ということも私には関係のないことである。

然り、如来の救済ということは大きな石を力の強い男が横抱きにして走るのとはちがうのだ。

救とは力を獲ることである。然り力である。永遠に生ききる力である。苦惱の中から生れる力である。

## 縁

美しい勇しい音楽を聞く。私の心はゆるぎ出る妙音と共に遊ぶ。悲しき曲には悲しい思いが湧き、爽快なる進行曲には我が胸は躍る。

病む床に伏す病人に医者がもし、「治りませぬ」と言えば、悲嘆のどん底に沈み「全快出来ませぬ」と聞けば嬉しさに胸はおどる。

悲莊忠勇なる愛国の志士たちの物語を聞けば、我が裏には愛国の血が蘇つて来るではないか。

縁はそれ自身が私にふれる時、私のある心境をゆりうごかす。縁に随つて私の新たな心が生れる。弱い縁には弱い心の変化があり、強い縁には、強い心境が生れる。親鸞聖人は、大無量寿経を我が生命の書としてお読みなされた時、聖人の全体はそのどん底から久遠の迷える我を打ちくだかれて、永遠の大生命を得られたのである。見よ法蔵菩薩は、無上正真の大菩提心をおこして、五劫に考え、兆載不可思議永劫の大修業に入つて、その血と汗と涙とをしぼつたではないか。大無量寿経ほどの強い縁が又

とどこにあろうぞ。されば御本典の総序には「噫弘誓の強縁は多生にも値ひ難く真実の浄信は億劫にも獲難し。遇行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」と申された。

## 心

私の心は縁次第でどうにでもなる。おかしいことを言う人の前では笑い、悲しい哀話を聞いては泣く。たたかれたら腹をたてる。私の心は縁次第で浮びでもするし、沈みでもする。

法蔵は正覚をとつて阿弥陀仏となった。南無阿弥陀仏とはその名号である。全体である。弘誓の強縁とは、その名号を聞くことである。聞其名号の縁にふれた私の心は、泣くか、恨むか、悪むか、悲しむか、卑下するか、高慢になるか、否々、私の心の底は、その名号にふれる時、力強いある力に高鳴る。その私の心境を信心歓喜という。

## 決定

観無量寿経を播く時、釈尊は阿難及び韋提希夫人に告げていられるその中に、下品中生往生がある。

「かくのごときの罪人、悪業を以ての故に應に地獄に墮すべし。命終らんと欲する時、地獄の衆火一時にともに至らん。善知識の大慈悲をもつて、ために阿弥陀仏の十力威徳を説き、広く彼の仏の光明神力を説き、また戒・定・慧・解脱・解脱知見を讃ずるに遇わん。この人、聞きおわりて八十億劫の生死の罪を除く。地獄の猛火、化して清涼の風となり、もろもろの天華を吹く。華の上にみな化仏菩薩ましまして、この人を迎接す。一念の頃のごとくに、即ち七宝池中の蓮華のうちに往生することを得」とある。

大無量寿経の下巻、本願成就文には、釈尊は次の如く説いた。

「諸有衆生其の名号を聞きて信心歓喜し乃至一念せん。至心に廻向したまへり。彼の国に生れんと願ずれば即ち往生を得不退転に住せん。云々。」

聞其名号の縁にふれた私の心は信心歓喜する。そして私の内には如来の全体が廻向されて私の生命となる。力となる。私は乃至一念に決定する。即得往生住不退転と決定する。

心、縁、決定、これは私たち全ての生活形式である。悪縁でなくて、善縁、弱縁でなくて強縁、善、強なる縁にふれた即時、「地獄の猛火は化して清涼の風となりて諸の天華を吹く。」これほどの大事が死んで冷たくなった時にあると思うのか。

## 七、更生

永劫の火、今足下から燃えあがる永劫の火、それが即座に清涼しい風とかわり、鬼の姿が天華と変わるほどの強縁に出会って、それがあなたの内面の力と変わるほどの強縁に出会ってもまだ、苦を負いきる力がないというのか。

過去の罪悪、人にも言われぬ人知れぬ罪悪、それが思い出されて悩むというのか。それは尊いことでもある。けれども

□ 薪が多ければ、それに火づけられた時、火も亦大きなことがうなづけるか。

□ 病気が重ければ重いだけ、全快の出来ることの喜びも大きである。

□ 八宗の祖師、聖者龍樹がはじめから聖者であったか。

□ 悪に強き者は善にも強い。

□ 大きな悪もなく大きな善もないために平凡に暮すよりは、大悪を行っても悪人だと徹底した者の方が仏にちかいことを知っているか。

□ 愚禿親鸞の誕生、極悪最下の泥凡夫の自覚、それが即ち聖者親鸞の誕生であったことがわかるか。

□ 救済されたら罪惡の過去が更生つてもものを言うことを知っているか。

こんなことを言ってもきりがなければ、徒らに過去を見て泣いてはならぬ。

## 八、忍受

眼を閉じて各地の親しい同胞の上に想いを馳せる時、苦悩を抱いて泣きつつある人が次々と表れる。

苦悩人たるあなたよ。どつしり大地の上に立つてみ仏のみ声を聞こうではないか。生死の苦海に雄々しくも身をなげたまいまいしみ仏は、現にあなたの魂に南無阿弥陀仏と叫びたもうてあるではないか。私の過去の罪を生かし、悪を救い、偽善の面をやぶり、失敗に目覚めさし、死んでいる私の過去全部に生命の息をふきこみたもうたではないか。痛ましき地上の約束に縛られた私は、悪人でもあろう。罪人でもあろう。地獄一定でもあろう。けれども我が罪のいと小さき片鱗をも棄てず、我が苦悩をそのまま我が苦と感じたもうみ仏は、絶対に一切を引き受けて、これがあるからいけぬとおっしゃらずに、一切を引き受けて下さるではないか。

静かにみ名を念じて、永劫の苦をあるがままに背負つて行こうではないか。

○ほんとうの浄土は、樂しみの幻影を追うて行く、樂しみの彼岸にはない。

○ほんとうの浄土は、寂しい、悲しい業苦を負うて、永劫の苦を忍受する人の今日の一足の中から開かれる。

彼には彼の苦しみがある。私には私の苦しみがある。私は私の荷物を誰に負うてもらふことも出来ぬ。他人に苦悩の責任をぬすりつけたり、苦悩を他人に担わせようとすればするだけ、私の苦は重くなる。静かにみ名によつて負うて行こう。自ら進んで負うて行こう。今日の荷物を今日だけ負うて行こう。

苦を超えるには、苦を自ら負うて行くより外に道はない。

貧しい者は貧しさを、病む者は病を、迫害される者は迫害を、責められる者は責め苦を、誤解される者は誤解を、静かに背負うて、やがてみ仏によつて全部癒される日を待とう。

## 九、智慧

生きた者は太る、伸びる。自分を無限に創造つくりあげてゆく。伸んで行こう。太って行こう。魂の求めるがままに伸びよう、太ろうとするその本願の前に何か障碍物が出来た時生きた者は苦を感じる。

伸びねばならぬ、太らねばならぬ。けれどもそこには智慧がいる。み仏は愚痴な私の智慧になつて下さる。温い春風がそよそよ吹いて来て深山の雪のとける時、長い間忍んでいた木の芽は柔く外にのんで来る。伸んで茂っている間には風が吹いて枝が折れる日もある。せつかく美しく花を咲かせても悪戯小僧に折られたり、虫に蝕われることもある。

幸運に楽しく暮せる日には、草木も人も外にのびる。人生の長い旅には、追風に帆をあげたような日もある。けれども、色々な苦しいことも湧いて来る。苦しいことに出会った時、強いて、もがいたり、自然にさからつて、外に手を出しては相成らぬ。枝が折れても悲しむな、花を折られても苦しむな。枝の折れ目に若芽が茂る。花は又咲く時もある。人生の逆境に出会っても唯悲観しているばかりではならぬ。智慧は苦悩から生れ、力は苦悩する時得られる。

冬が来て木の葉が皆な散る時は内に力の出来る時。幹に数える年輪は内に力のこもる冬に自然に出来た苦のあとだ。毎年冬になれば内に力が充実して幹の年輪が出来る。年輪のかたさがあればこそ、材木のかたさと、美しいもくめが出来る。人間にもこの年輪のない人にはほんとの力も美しさもない。人生の冬とは苦悩の時である。外に伸びて内に充実する。これが生きてるものの歩みである。

## 愛

### 一、人間愛

浄土真宗は、人間のお互同志の間に行われる小さい愛や慈悲善根の上にみ仏の光を拝まうとはせぬ。

世には人間が行う美しい行為の上に神様の栄光を讚美しようとする聖者の宗教もある。けれども愛は神ではない。否むしろ私は人間同志の愛にたよりすぎて、幾度も苦い味をなめねばならなかった。それよりも私自身が、愛しようとして愛し得ざる悩みを持つただ一個の凡夫ではないか。私は弱い。私は無智だ。

人間苦にさいなまれて、大海の捨小舟のような自分を見出した時、私は私のほんとうがわかる。他人を愛するどころか私自身が救われがたき常没の衆生である。他人を助けようとして他人をも一緒に沈めるのではあるまいか。それならば親鸞聖人には人類愛はなかったであろうか。

### 二、聖人と愛

親鸞聖人は一生の間、決して普通の人間が求めている意味での勝利者でも成功者でもなかった。否、むしろ、この土においては全てに失敗というよりは、この土の全てに愛想をつかされたお方であった。全てをそらごとたわごとと見ねばならぬ痛まし

い現実の上に、如来より与えられたたった一つの念仏に微笑まれた方であった。聖人には人間という者があまり見えすいていた。聖人もまた苦悩の人生をお味い遊ばされた。幼くして親に別れたまい、叡山二十年の御修業はいうも更なり、吉水教団の御繁昌もわずか、師の上人と共に北国に流罪の身となられ、寂しい久遠の業苦にむせびつつ愚禿とひれ伏したまい、関東稲田の草庵にわびしいお住居、晩年は京都におかえりなされても、大きな寺院があつたのでもない。御長男の善鸞様は御勘当、こうした痛ましい聖人であつたらこそ、絶対他力のお慈悲を体験遊ばしたのである。こうした聖人は決して種々なる苦情に泣く人を、高くとまつてせせら笑つたり、冷たく通りすごして行かれる方ではない。けれども亦力なき自力を過信して、高慢なる衆生救済的な意識を持つたり実行したりするような聖者でもなかつたのだ。

### 三、徹底せる愛

自分という者を徹底的に知らない人ほど、他人のことをかれこれ言おうとする。痛ましい宿業が表れて、犯してはならぬ罪悪が表れた時、聖者らしく気取る人や、自分という者をほんとは知らない者は、社会を汚す毒虫のように、攻撃を加えたり、批難の弓矢をむけたりする。けれどもそれが私に出来ることであろうか。隣の家の家内喧嘩を見て、仕方のない野卑な家庭だ、とののしつた、その翌日には、自分の内に冷たい睨み合いがはじまりはすまいか。

こんな目で自分を見、社会を見た時に、他人の醜い姿は、そのまま私の姿である。殺す人の心も、嫉妬する人の心も、盗みする人の心も、あらゆる汚さを自分の内に見出した者は、悲しい社会相をながめた時、「それが私の姿であります。」と共に泣く以上のことか許されてあり得るだろうか。

それではあまり愛のない見方に考えられる。そうだが、唯、道理だけや議論上の問題だけならば、そうかも知れぬ。けれどもこれが徹底されたる世界では、どうして魂に涙なくしてあり得ようか。けれどもこれが地上にゆるされる最上の愛ではあるまいか。争鬭や呪詛やに満ちた地上に、如来による浄土の投影が現われて下さるのではあるまいか。愛しようとして傷つけたり、愛したと自惚れたり、愛する者のような偽善者になつたりすることなくて、無意識なる愛の世界が如来の慈悲によつて作られてゆくのではあるまいか。

苦悩をあまりに受けすぎた人はひがんだ心の持ち主にもなる。けれども苦悩から宗教の天地に導かれ、如来の本願に救われた人たちには、苦であつた過去を感謝せねばならぬ時も来るであろう。そうして恵まれた隣人たちが血みどろの苦悩をなめつつある時、過去の苦は隣人の上に涙となつてそそがれよう。